

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 12 日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究（c）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520520

研究課題名（和文）第 2 言語としての日本語習得と日本語フィラー習得の関係に関する調査研究

研究課題名（英文）Research for the relation between Japanese language acquisition as a second language and Japanese fillers

研究代表者

小出 慶一（KOIDE KEIICHI）

埼玉大学・教養学部・教授

研究者番号：60178192

研究成果の概要（和文）：日本語学習者の発話に現れるフィラーについて発話コーパスを分析し、その結果、一定の出現順序があり、それは概ね、母音の長音形フィラー、指示詞からの派生形フィラー、副詞からの派生フィラー、そして最上級段階に指示詞の一部（「この一」）が現れることを跡付けた。これは、習得の深化に伴って起きる現象であることを述べた。

研究成果の概要（英文）：By analyzing Japanese language learners' corpora about their uses of fillers, the sequence of acquisition of fillers was clarified: longed vowel, fillers derivated from demonstratives, those from adverbs, and finally again derivation form from demonstratives. It was said that the sequence is the phenomenon accompanying the development of Japanese language acquisition.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	400,000	120,000	520,000
2011 年度	400,000	120,000	520,000
2012 年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	119,000	330,000	1,430,000

研究分野：日本語教育

科研費の分科・細目：人文学・言語学・日本語教育

キーワード：フィラー、話しことば、第 2 言語習得

1. 研究開始当初の背景

フィラー研究は、近年しだいに盛んになりつつあるが、体系的に検討されることはほとんどなかった。が、日本語学習の観点から見ると、フィラーは単に「場つなぎ」などではなく、談話タイプを特徴づけるものでもあり、また、コミュニケーションの円滑さを保つためにも重要な機能を持つものである。

また、習得という観点からは、習得段階の指標になる言語項目を拾い上げることは、習得段階を捉えるために必要な情報である。フィラーが、その指標になり得るのではないかと

という予想を経験的にはあるが得ていた。このような背景から、本研究が着想された。

2. 研究の目的

日本語教育においては、フィラーは、意識的に学習項目として取り上げられることはほぼない。しかし、経験的に、日本語習得の進展にともなって、出現フィラーに変化があるのではないかと感じていた。このような経験的な観察が妥当か、また、もし日本語習得段階とフィラーの出現順序の間に相関があるとしたら、それはどのようなものか、これ

らの点を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

日本語学習者に対するインタビューを集めた既存のコーパス（「KY コーパス」「インタビュー形式による日本語会話データベース」）に収められた文字化資料を分析対象とし、学習段階ごとに、日本語母語話者の発話での出現数の多い13のフィラーについて、出現数を調べた。その結果に基づいて、出現フィラーの性質についての、質的な分析を行った。また、各フィラーについての分析においては、認知意味論の立場から派生のプロセスを記述した。

4. 研究成果

日本語のフィラーが、日本語学習者（第2言語としての日本語を学習する者）にどのように習得されていくか、日本語学習者の習得段階とそのフィラー使用との間に何らかの関係があるか、あるとすればどのような要因によるか、このことをテーマに研究を進めた。

この問題に関しては、小出（2011）において、OPIの学習段階設定に従って示せば、初級（母音延引系「あー」）→中級前半（指示詞系「あの一」）→中級後半（母音延引系「えー」「えーと」）→上級（副詞系「まー」「もー」）→超級（指示詞系「こー」）のように、学習段階とフィラーには画然とした相関関係の見られることを指摘した。フィラーは、あくまで対象言語の体系に属するものであり、学習の対象となるものなのである。しかし、フィラーは明示的な学習項目として取り上げられることは、「あの一」を除いてほぼない。それにもかかわらず、習得が進み、かつ、学習段階と相関している。

これは言語の自然習得が体系的に進むということのよい例であると思われる。しかし、その一方で、日本語母語話者が少数であるが使用する「この一」などの出現が日本語学習者にほとんど観察されなかったことを見ると、母語話者の使用頻度が反映したもので、学習者は話しことばの日本語に触れ、その際に、フィラー使用について統計的な出現状況の処理を行っているからではないかとも思われる。フィラーは、話しことばにはつきものであり、そのような統計的な処理を行うためのデータには事欠かないからである。

また、発話には、フィラー的な要素が必要であり、明示的な教示の有無にかかわらず、日本語学習者は必要な形式を探すことになる。フィラーは、発話内容そのものの形成にはかかわらないが、発話行動というものを形成するためには欠かすことのできないもの

なのであるし、フィラー研究は発話行動という観点から行われるべきものと思われる。以上が、本研究の中心的な観察である。以下に、これらの知見のもとになった各論文の概要を記す。○囲み数字は、5. 発表論文の番号。

①本稿では、フィラーとしての「ちょっと」がどのような過程で派生し、またどのような機能を持つか、その機能は程度副詞やモダリティ副詞とどのようなつながりを持つかについて検討した。

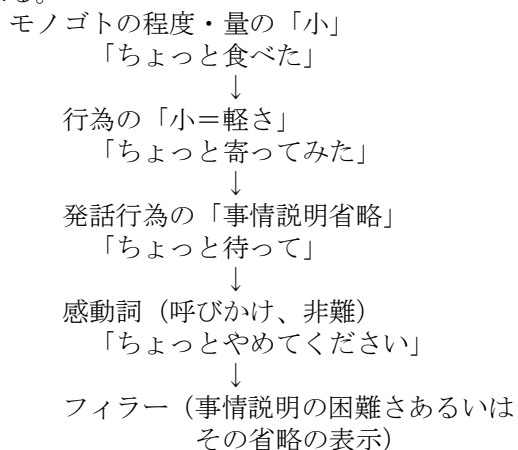
議論を簡単にまとめると、まず、「ちょっと」は程度副詞として程度と量の「小」を示す2つの用法を持つものであり、「少し」と同じ類に区分されるものであった。しかし、「少し」が物理的な量の表示に使われるという制約があったのに対して、「ちょっと」は、「ちょっと寄ってみた」というような行為の軽さというような心理的な度合いの用法を持つところから、「ちょっと待って」というような対人的行為のやわらかな表現と共起するようになった。これが、「ちょっとやめよ」のような、程度性を持たない、遂行文などを導く表現へとつながった。程度副詞として「小」を表すという性質は、モダリティ副詞になる契機となったわけであるが、モダリティ副詞としては行為の軽さ、さらには、説明するほどのものではないという意味合いを持つようになり、さらには、当の発話行為の意図や、背景などの説明を省略する際の注釈表現としての機能を持つようになったと考えた。

感動詞としては、呼びかけ、非難の2つの用法を認めたが、それも、「ちょっと」との共起性の高い、否定的、あるいは対人要求的な発話行為とのつながりがあるために派生したものであると考えた。

そのような用法が基盤となって、フィラーとしての用法を持つようになったと考えられる。フィラーとしての「ちょっと」の中心的なものは、事情説明などが手間取りそうである、あるいは説明がいささかやっかいだというようなことを示しつつ、それを表示をすることによって、説明や表現を省略するというものと考えた。

フィラーとしての「ちょっと」がこのような機能を持つのは、繰り返しになるが、「ちょっとやめろ」「ちょっと忘れた」という表現の副詞「ちょっと」が、なんらかの理由や事情があるために「やめろ」「忘れた」と言っているということを暗示しつつ、説明を回避する機能を持ったことに起源をもつ。これが、構文的な位置づけは不明確なままに文に現れ、発話全体の基調を示すことになったのが、フィラーとしての「ちょっと」である。構文的な位置づけが不安定でありながら出現するのは、モダリティ副詞としての、発話全体

にかかわるといふ性質を受け継いでいるからだと思われる。つまり、呼応が予想されながら、その呼応先が統語的に明示されない形で現れるものがフィルターの一つのタイプであり、「ちょっと」は、他の副詞系フィルターと派生の事情を共有している。以上の広がりを図式的に示すと次のようになる。



②本稿では、日常会話に多く現れ、また日本語学習者の習得も早い「そうですね」という応答詞の性格を検討したものである。ここでは用法を3つの区分に区分した。仮に「そうです」「そうですねA」「そうですねB」と呼ぶとすると、その3つの性質をまとめると(1)のようになる。また、それを図式的に表したものが(2)である。

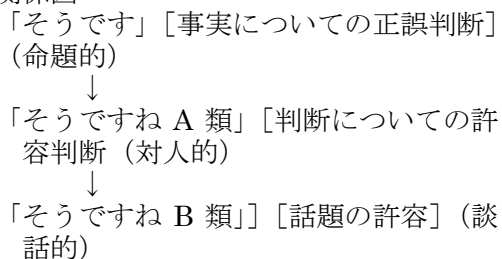
(1) 3つの用法の関係

そうです：先行発話を「XはYだ」という判断と捉え、その判断を、情動的な観点で肯定する。正誤の観点は重視される。

そうですねA：先行発話に含まれる判断について、自身の解釈過程を通じた上で、その判断が許容できることを示す。正誤の観点は二次的になる。

そうですねB：先行文脈を受け、その話題を捉えなおした上で、自身の表出を行うことを示す。

(2) 「そうです」「そうですねA類・B類」の関係図



以上のように、本来の命題への反応から、談話話題の許容という緩やかなものになっており、学習上の重要性が指摘された。

③本稿は、上級日本語学習者の発話に散見される「いや」の性格について検討したものであり、次のような結論を得た。

1) 談話での「いや」の機能

「いや」は、話し手が、談話の方向を自身の想定する方向へ誘導するためのマーカーとして、談話レベルで機能するものである。相手からの質問などへの否定応答をその中心的な機能とするのではない。応答に止まるだけの受身的なものではなく、談話操作という能動的な性格を持つものである。

この性格のゆえに、「いや」だけでは完結しないということになるのだろうと思われる。同時に、この性格のために、どのような内容が続くかは予想できない面も持つわけで、質問への直接的な否定が現れる場合もありうる。

また、この性格のゆえに、WH疑問文にも現れるのだろうと思われる。

2) 「いや」の否定性

また、話し手が、自身の想定する方向へ談話を誘導するためには、先行する談話の流れをいったん停止させる必要がある。このためのマーカーとして「いや」は使われるわけであるが、ここに「いや」の否定性の由来があると思われる。

④この論文は、日本語学習者の上級段階で出現する「こう」を中心に、指示詞としてどうけいれつにある「この一」も含めて検討したものである。本稿の検討でどのようなことがわかったかをまとめると次のようになる。

1) まず、母語話者のフィルター「こう」「この一」の性質については、次のように捉えた。

・「こう」の性質

「こう」は、心的に思い浮かべられた対象を、言語化のために、分節し、表象的な把握を行うとともに、言語生成へと向かう心的な動きを、ある場合には一括してまたある場合には時間的な流れの中で捉えつつ、言語化への動きを促進するものである。

・「この一」の性質

「この一」は、発話時に心内に思い浮かべられている対象について、その対象を把握し、表現するために必要なラベル、カテゴリ名、表現の探索を行っている時に出現し、仮の当てはめへと促すものである。

2) 日本語学習者の場合、フィルター「こう」は、超級学習者になってはじめて現れることが見られたが、これは、自身の発話生成の過程に、イメージ的な要素の言語的な取り込みを行いつつ発話を進めるといふ、より創造的な発話が行われるようになってきたからだと捉えた。

3) また、その一方で、同じコ系フィルター「この一」がほとんど現れないことについては、

通常の発話においては、内容をどう表現するかということは多く問題になるが、その対象にどのようなラベルを貼るかというようなことは、問題とはなることが多くないという事情を反映していると考えた。

4) フィラーは、発話において、言語的な発話形成にも寄与していると考えられる。ジェスチャーが身体動作と通してイメージを表象するものであるとするなら、フィラーも心的走査という心的な活動を通してイメージの表象を促すものと並行的に考えられる。

また、「このー」が超級日本語学習者でも出現が少ないのは、「このー」が発話時の処理状態そのものを意識化したものであり、適当な言葉を探すなどの言語内容への指示性を失っているためではないかと考えた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 小出慶一 フィラーとしての「ちょっと」について、埼玉大学教養学部紀要、査読なし、48巻1号、2012、59-71
- ② 小出慶一 応答詞「そうですね」の機能について、埼玉大学教養学部紀要、査読なし、47巻1号、2011、85-97
- ③ 小出慶一 「いや」の否定性と談話での機能、埼玉大学教養学部紀要、査読なし、47巻2号、2011、145-156
- ④ 小出慶一 日本語学習者の発話に見られるフィラー「こう」について、埼玉大学教養学部紀要、査読なし、46巻2号、2010、99-112

[学会発表] (計0件)

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等
該当無し

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小出 慶一 (KOIDE KEIICHI)
埼玉大学・教養学部・教授
研究者番号：60178192

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：